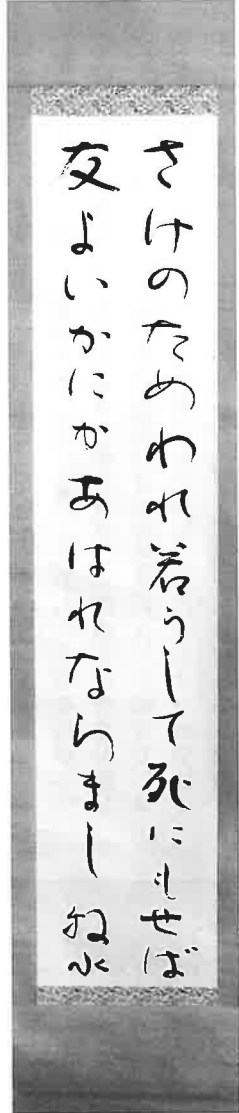


沼津市若山牧水記念館

第44号 2010.3.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



さけのためわれ若うして死にもせば
友よいかにかあはれならまし 牧水

明治四十四年九月博信堂書房から発刊された第四歌集『路上』には、四十三年一月から四十四年五月までの作品が収められているが、半切の歌は四十三年春に詠ったものであろう。『路上』の冒頭の歌は「海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり」で、「さけのため」はその三十七首目に置かれている。

この頃の牧水は、一月一日に第二歌集『独り歌へる』を刊行。これは不満の多い出版だったが、三月一日には念願の詩歌雑誌『創作』が発刊され大評判であったし、四月十日には第三歌集『別離』が東雲堂から出されて歌人としての名を不動のものにしたのだった。しかし、小枝子との混沌とした愛のもつれから、「あわただしく汝をおもひゆふぐれの窓かけのかけに涙ぐみぬる」と詠い、「玉のごときなむちが住める安房のなきさ春のゆふべをおもひかなしむ」と嘆く。さらに、なほ耐ふるわれの身体をつらにくみ骨もとけよと酒をむさぼる

酒すすればわか健かの身のおくにあはれいたましき寂しさの燃ゆ

あな寂し酒のしづくを火に落せこの薄暮の部屋匂はせむ
と詠い、「さけのため」の歌に続く。

『創作』は益々隆盛になり、七月号、八月号と発行を続けるが、編集を佐藤緑葉に任せ、牧水は傷心の想いで九月二日東京を離れる。『創作』九月号の「縦の木蔭より」と題した小文の末尾に「色々の境遇上からか今年は秋が来たといふ事が今迄にない恐怖を私に感ぜしむる。……」と書いており、山梨の飯田蛇笏を訪れた後、小諸の田村病院の一室に落ち着いたのだった。『別離』の作品群は、同時期に出た前田夕暮の『收穫』をも凌駕して青年達に迎えられ、「幾山河」「白鳥は」などは万人の愛誦するところだったが、その名声を捨てるように信州へ逃避した牧水の心身の疲れはいかばかりであったか。まさに純粹の極みで、永遠の青年牧水の原点でもあったかと思うのである。時に牧水満二十五歳。

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな
白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ
は、その小諸での作品であり、『路上』所収の悲しみに打ちひしがれた作品群の中に、これらの歌があることは救いのように思える。

(須永秀生)

牧水と現代

坂井修一



筆者（沼津牧水祭・短歌大会にて）

若山牧水という歌人について、ここ三年ほどで何度もお話をしたり、原稿を書いたりする機会がありました。今回もその流れの上で、牧水の文芸のありようと今の世の中のありようを比べて、日ごろ私が感じていること、考えていることを申し上げたいと思います。

牧水の歌には、「かなし」「さびし」「なつかし」など、感情を直接表す言葉がよく出てきます。

相むかひ世に消えがたきかなしみの秋の
ゆふべの海とわれとあり 『独り歌へる』
酒すすればわが健かの身のおくにあはれ
いたましき寂しさの燃ゆ 『路上』
秋くさのほなよりもなほおとろへしわれ
のいのちのなつかしきかな 『路上』

こんな具合です。

それぞれの歌がしみじみとした調子で歌われているため、読者としては牧水の情緒に自然に共鳴してしまいます。ただし、共鳴するからといって、これらが簡単に理解できる作品かというところでもないでしょう。私なども、牧水の歌を愛唱しつつ、その不思議に何度も立ち止まらされた一人です。

最初の歌で、「相むか」うのは、誰と誰でしょうか。これは、「海」と「われ」と取るのがふつうでしょう。その上で、「世に消えがたきかなしみ」を感じるのは、「海」と「われ」の両方でしょうか。それとも「われ」だけでしょうか？

表現上は、「海」が「かなしみ」を感じている

とは歌われていません。したがって、「われは海と向き合いながらひとりでかなしみを感じている」と取るのが、常識的な読みということになります。

いっぽうで、この歌には「海もまたかなしみを感じているかもしれない」と思わせるところがあります。牧水はここを明言していません。世界全体に消えがたい「かなしみ」があることを言いながら、海が「かなしみ」を感じているかどうかについて、字面の上では肯定も否定もしていません。

海を擬人化しながら、「世に消えがたきかなしみ」を感じる主体をぼかしてみせる。このぼかしが、なんともいえない魅力をこの歌にもたらしています。読者は牧水の歌の調子の良さに感嘆した後、その内容の、明瞭でありながら漠とした広がり、にしみじみと感じ入ってしまうでしょう。



第2歌集『独り歌へる』



第4歌集『路上』

二首目は、お得意の酒の歌ですが、この歌も作りは単純なようで中身は深いものがあります。二句三句の「わが健やかかの身のおくに」は、なにげなく見えておもしろい表現と思います。自分の「身」を他人の目で見ているような、視点の位置が少し高くなっていくような感覚がある。そして、「あはれいたましき寂しさの燃ゆ」という強い詠嘆の下旬が来ます。

牧水はここで、視点を少し浮かして、自分の中の深いところにある「寂しさ」をいっそう深いものとして表現しています。ただし、この「寂しさ」は、深いには深いが決して複雑なものではありません。純粹で自然で大きくて、それゆえにただ「寂しさ」としか言いようがないものです。

三首目の歌。秋も深まって、草花が枯れしぼんでいく。それよりも、自分のほうがさらに衰えている。その衰えた自分の命を「なつかしき

かな」というのです。思えばずいぶんと悲惨な状態のわが身を、しかしどこか落ち着いた涼しい目でとらえ直しています。

この歌を作ったときに、牧水はどんな状態にあったのでしょうか。

「色々の境遇上から今年秋が来たといふ事が今迄にない恐怖を私に感ぜしむる。この恐ろしい秋に際して私は暫く旅に出てみたいと思ひ立つた。先づ信州辺から始めて北国畿内中国四国あたりまで行き得れば行つて見度い」

〔創作〕明治四十三年九月号

「色々の境遇」とは、第一に、恋人の園田小枝子との関係が破綻し、しかもずるずると尾を曳いていたことを指します。第二に、健康を害して、逃れるように信州小諸の病院に滞在していることがあります。

「秋くさ」の歌を作ったときに若山牧水はそうした悲惨な境遇にありましたが、この歌からは過去の自分への反省とか、小枝子への怨みなどは見えてきません。ここにあるのは、あくまでも普遍的な「われのいのちのなつかし」さです。

牧水が、若々しいが無謀ともいえる恋愛の結果として不幸を背負いこみ、その上でこうした普遍的な感情表現を得たことは、今の私たちの目で見ると、大きな違和感をおぼえるところかもしれません。ものごとには何でも因果応報というものがあって、これを考えずに結果だけを



『創作』明治43年9月号

受けいれておどろきっぱに詠嘆するのは愚か者のすることである。そんなふうにも多いこととしよう。

たしかに牧水は、現代のわれわれの目から見れば愚か者にしか見えないうところがあります。経済性・合理性のまつたくない旅を一生続けたあげくに、お酒の飲み過ぎがたつて肝硬変を起こして死んだ牧水。明治・大正の富国強兵とか殖産興業とかいう大きな流れから身を引くように、ひたすら歌を詠むことで暮らした牧水。この牧水について、私は最近、次のように書きました。

「牧水のやりかたは、明星の『自我の詩』から遠く、アララギの『実相観入』からもはるかに隔たつたものだ。そうした近代のドグマから自由であつただけでなく、自然や世界と渾然となりながら、彼の『なつかし』『かなし』は異質な深刻さをもっていた。今に牧水を思うときは、



評論集『世界と同じ色の憂愁』

この深刻さが何であるのかをよく吟味してみる
ことが大切なのだろう」

(坂井修一『世界と同じ色の憂愁』青磁社)

もう一步踏み込んでいえば、牧水の「かなし」「さびし」「なつかし」には、明治・大正・昭和・平成と続く日本の近代・現代をぜんぶひっくるめて相対化してしまうところがある。そのことにこそ、今の私たちが若山牧水から学ばなければならぬことがあるように思います。

*

牧水は、晩年に(日本に併合された)朝鮮に揮毫旅行に行ったほかは、海外旅行をしませんでした。欧米に行ったならどういふ歌を作ったのでしょうか。あるいは、インドや南米を旅したならどういふ歌を作ったのでしょうか。これは、とても興味深い設問といえます。

牧水の育った明治という時代は、欧米のアジア進出ということが引き金となって作られた時代です。その欧米とは、国民国家、産業革命、資本主義などという言葉で語られるものでありました。私たちの生きる二十一世紀の世界もまた、この流れを大きく引きついでたところにあります。

私の同僚に、インターネットの研究開発の中心人物がいますが、彼の「旅」はすさまじいものです。彼は、一週間でアメリカ、ヨーロッパ、中東と世界一周の出張をします。寝るのはホテルのこともありますが、飛行機の機中のことも多い。したがって、四泊七日などという旅になるわけです。

旅の間も日本の仕事もします。それも単に日本からもってきた書類を読んだり、飛行機の中でパソコンを広げてたまたまっていた原稿を片づけたりするということだけではありません。携帯用のテレビカメラとマイクを使って、インターネットを介したテレビ会議をやり、遠隔の講演会や講義をこなすわけです。

牧水さんがもし生きていれば、「そんなものは旅とは呼べない」とおっしゃることでしょう。

いっぽうで、インドや南米の国々を旅するのととても不思議な光景に出会います。そうした国の多くの人々は、明らかに欧米や日本の人々とは違う人生観で暮らしています。同じような服を着て、同じような電車やバスに乗っていても、

考えていること、感じていることが違う。したがって、人生そのものが根底から違ってくる。社会学者の見田宗介は、インドや南米の市場(バザール)で、ちよつとしたものを売り買ひする光景について、次のように述べています。

「売る人と買う人の間で交わされる会話の長さは賭けられている金額のわずかさからみると割に合わないくらいのもので、しかも最後には、相手が気に入らなかつたりするみたいなこと、長時間にわたった交渉の成果を惜しげもなく放棄しておまけしてくれたりします。彼らの意識では、たぶん損得にこだわっているつもりらしいが、無意識にはそういう交渉自体を楽しんでいるように見えます」

(見田宗介『社会学入門』岩波新書)

交渉自体の楽しみは、たとえば日本のデイトレーダーにもあるのでしょうか、デイトレーダーは相まみえることのない同業者たちを出し抜



『社会学入門』

いて儲けるために、金銭をあらゆる数字の増減だけに注力します。いっぽう、バザールの商人たちは、ツバを飛ばして客と交わりながら、その交わり自体に人生の深みや面白みを味わっているということでしょう。

見田は、こうした光景の観察を次のような言葉でしめくくっています。

「インドやラテンアメリカのような世界で、非効率で時間が有効に使われないのに永く生きみたい感じがするという矛盾は、ここでは時間が上滑りしていないこと、時間が『使われる』ものでなく『生きられる』ものであること、だから人生が上滑りしていないということと、関わっているように思います」

(見田宗介「社会学入門」)

たった一週間でたくさんの仕事をこなしながら地球を一周する時間と、バザールで取るに足りない物を売り買いする時間と。明治以後の日本、いわゆる近代日本がめざしたのは前者の時間であり、若山牧水が生きたのは後者の時間ではなかったでしょうか。先に、牧水の歌には、他の歌人たちとは異質な深刻さをもっていると述べましたが、その深刻さは、「時間が『生きられる』ものであること」から来るのではないのでしょうか。そして、「二つの時間」の間に深い亀裂を見ることが、今という時代に牧水を読むということではないでしょうか。

いささか乱暴な決めつけかもしれませんが、今の私はそんなことを考えてみたりしています。

*

現代、特にインターネットによる情報革命以後の今の時代について、少し考えてみましょう。

次にあげる詩を読んでみてください。二〇〇四年に作られたもので、当時小学校六年生だった女の子が作ったものです。

うぜークラス

つーか私のいるクラスうざったてー。

エロい事考えてご飯に鼻血垂らすわ、

下品な愚民や

失礼でマナーを守っていない奴や

喧嘩売ってきて買ったら「ごめん」とか言つて謝るヘタレや

高慢でジコマンなデブスや

カマトト女しかったか男、

ごく一部は良いコなんだけど大半が汚れず

ざ。

寝言言ってるのか？って感じ。

顔洗えよ。

い

いかがでしょうか。

憎悪に満ちたひどい詩だ。表現もなっていない。「うざったてー」とは「うざったい」(こま

ごまとしてうつつとうしい。煩わしい。面倒臭い「広辞苑」の変化したものでしょうか。それにしても、作者は人のことばかり言っているが、自分自身はどうなのだろう。

そんなことをお感じになるでしょうか。

実は、この詩の作者は、二〇〇四年六月一日に長崎県佐世保市で同級生(女子)を殺した、殺人事件の加害者です。衝撃的な事件でしたので、こう書けば、あああれか、と思いつく方も多いと思います。

その犯行の少し前に作った詩がこれなのです。インターネットの掲示板に発表していたようです。あるいは「詩」という意識はなく、ただの書き込みにすぎなかったかもしれません。

事件について、少しだけ詳しくふりかえってみましょう。

二〇〇四年六月一日のお昼に、加害者であるこの女の子(当時十一歳)が、小学校の学習ルーム(教室とは別に先生が少人数の生徒を指導するのに使う部屋)に同級生女兒を呼び出し、座らせて、後から手で目隠しをした後、カッターナイフで彼女の首を切りつけて死なせました。この二人は、それぞれインターネット上にホームページをもち、チャットをしたり、掲示板に書き込んだりする仲だったそうです。周囲からは、二人は仲良しと見られていたらしい。

この年の五月下旬に、被害者が加害者をおん

ぶしたときに、「重い」と言った。それに対して、加害女児は、「失礼しちゃうわ」と答えたのだそうです。それだけで終わればよかったです。この被害女児は、自分のホームページの掲示板に「言い方がぶりっ子だ」と書いて、からかってしまった。それを見た加害者のほうは、その記述を削除しました。

このようにインターネットを介して、二人の関係は、どんどん悪くなっていったようです。関係は、どんどん悪くなっていたようです。

掲示した詩、言葉遣いはひどいですが、筋の運び方は論理的ですし、感情の盛りあげかたや詩としてのまとまりも、特に最後の「顔洗えよ」など、なかなか上手ではないかと思えます。十一歳の女の子が作る詩としては、かなりのものではないでしょうか。

いっぽう、この詩を見ると、「エロ」「ヘタレ」「高慢」「ジコマン」などなど、この女の子が嫌悪感をもつものがアラレもない姿で表現されています。たしかにこういう性格をもつ男の子、女の子を嫌う気持ちはわかるでしょう。

しかし、これらは人間のもつ自然な性格を少し強調したものとも見えます。つまり、程度の差はあれ、誰でもこういう性質をもっているのではないかとということです。

この殺人を犯した女の子は、人間が自然にもつ負の性質を全面的に否定する。まさに、一かゼロで、ゼロとするのです。牧水が、人間のもつ自然の性格をそのままに受け入れようとし

たのとは反対で、これを拒否する。正の性質ばかりを肯定して、親友であったはずの被害者に少しでも負の性質があると許せなくなる。

いったいなぜ、こういうことが起こるのでしょうか？ インターネットやITが悪いのか。時代が酷薄になってしまったのがいけないのか。いろいろご意見はあると思いますが、これはやはり社会的・構造的な問題につながっていくのだと思います。

*

世界と、特に「自然」と同じ色のさびしさや悲しみをもちつづけた牧水と、世界をあるがままに受け入れられずに近しい友人を殺してしまふ現代の小学生。この二人の落差を見ることをきっかけに、牧水と現代の関係について少し考え、また感じてみたいと思います。

地とわれと離ればなれにある如き今朝の
さびしさを何にたとへむ 『白梅集』

この歌について、私はかつて次のように述べました。

「牧水においては、『地』と『われ』は決して離れ離れになることはなかったのだが、あたかも離れ離れになってしまった『如き』さびしさを味わうことはあつた。それはたとえがたい深刻なさびしさであつた。そういうのである。自然

と自分が一体でないことなどありえない。そのありえないことがあるように感じられるのは耐えがたい。

まず自分と自然を対峙させてから世界が始まる西洋では、これはありえない感慨だろう。近代日本でも稀な心動きではなかったか」

(坂井修一「世界と同じ色の憂愁」)

牧水は、旅を続け、自然と人間を見つめ続けることで、自然の一部としての人間にそなわつた「かなし」「さびし」「なつかし」を極めていきました。そこに世界と人生の渾然一体とした本性を見ていたわけですね。さきにも述べましたが、これは、近代という時代がめざすものとは全然違うものだったわけです。

小学校六年生の女の子のほうは、世界に対して強烈な嫌悪感をもっていました。自作の詩の中で、自分のクラスのほとんどすべての友だちを頭から否定しています。この世界のすべてと絶交しようとするかの勢いがあります。だからこそ、最後まで残つた友だちが期待通りでないことがわかつたときに、この子を殺さざるをえなかつた。

私は、今の社会に牧水的な自然観を復活させれば、こうした事件は減るのではないか、などということを申し上げるつもりはありません。身についた価値観として牧水を心の芯のところにもつことができる人は、過去のどの時代でも

ごく限られた人でした。まして二十一世紀の今日、これはきわめて困難なことですし、かえってとても不自然なこととも思われます。

いっぽうで、産業革命以後の世界、明治維新以後の日本がいつも大きな対立の構図の中で組み立てられてきたことも、牧水を考えるこの機会に思い直してみてもいいかと思えます。それは、人間対自然の対立でありましたし、先進国対発展途上国の対立でしたし、合理主義者対詩人の対立でもありました。私たちひとりひとりの中にも、この対立は解消せずにあるといつてよいでしょう。

この女の子のような極端な問題だけでなく、環境汚染や地球温暖化が深刻になってきた昨今、世界との一体感や汎生命的なものの方を大切にしなければならぬというお話は、皆さんもあちこちで耳にすることでしょう。人間を自然と対峙させてから富を追求する近代や現代の論理は、自分の「外」にある自然や自分と異質な人々からの収奪につながり、「内」を富ませつつも「外」を疲弊させる。あげくに地球温暖化など、人類存亡の危機を招いた。そういう議論です。この議論自体は正しいものですが、ではどうしたらいいのかと問われると答えに窮するのが多くの人の現実ではないでしょうか。この地球上で私たちが生きていくためには、特に欧米や日本で生きるためには、よほど財産のある家に

生まれなにかぎりは、厳しく激しい経済活動に身を投じて一生の大部分を暮らすことになりま

す。若山牧水の歌の「かなし」「さびし」「なつかし」は、人間と自然の純粹で深いつながりを表現していて、たしかにすばらしいものでありましょう。ただ、彼の態度をそっくりそのまま現在の文芸の場に持ち込むのは、やはり無理といわざるをえません。

「若山牧水の歌の『なつかし』『かなし』『さびし』『わびし』に比類ない価値を認めつつ、またこれを頭の隅に置きつつ、あるいは牧水の心情と連続するものを今に持ちつつも、二十一世紀の私たちは意識して別のアプローチをとらざるをえない。ただし、どのようなアプローチをとったにせよ、この時代にはこの時代の『世界と同じ色の憂愁』があり、牧水ほど純粹な態度でなくとも、その憂愁を個々に引き受けざるをえないことは確かなのだろう」

(坂井修一『世界と同じ色の憂愁』)

結論をいえばこういうことになりましたが、今の私に具体的な道筋が見えているわけではありません。牧水を愛する皆さん、この時代に短歌と人間を信じている皆さんといっしょに考え、少しずつ前進していきたいと切望している。今はそう申し上げるのとどめておくということかと思えます。

「プロフィール」さかい しゅういち

歌人。一九五八年愛媛県生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。東京大学大学院教授。一九七八年「かりん」入会。「かりん」編集委員。第一歌集『ラビュリントスの日々』で第三回現代歌人協会賞。第四歌集『ジャックの種子』で第五回寺山修司短歌賞。第六歌集『アメリカ』で第十一回若山牧水賞を受賞。評論『斎藤茂吉から塚本邦雄へ』で第五回日本歌人クラブ評論賞を受賞。歌集に、『群青層』『スピリチュアル』『牧神』『望楼の春』。評論集に『世界と同じ色の憂愁』。平成二十一年十月四日に開催した「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。



第6歌集『アメリカ』



第7歌集『望楼の春』

太宰文学のおかしさ

不器用に生きた天成の語り部

12月19日(土)
午後2時～

「太宰治生誕百年・第四回沼津文学祭」に協賛し、ドイツ文学者・エッセイストの池内紀先生を講師にお迎えして牧水記念館文化講座が開催され、会場は聴講者であふれた。先生は本会との縁の深さや太宰治にゆかりの安田屋旅館の印象などを当地への親しみを込めて語ったあと、本論に入った。

太宰治という作家はひとことと言うと話作りの名人で、一気に読者を話の中へ連れてゆく。



東北には古来語り部がいた。その伝統が太宰の中に引き継がれた。晩年は口述筆記だったが、そのまま文章になるほどだった。二十代はじめの自殺未遂、二度の心中未遂など自らの体験や、玉川上水での入水自殺さえその二ヶ月前に作品の中で予告するというように、迷いなく作品化する。捨てきれぬおかしさや悲しさを、考へることなくコミカルに書ける作家であり、サーブिस精神か、天成か、コミカルな要素を取り入れながら描いている。

先生は、その作品の人物像が浮かび上がるように場面を読み上げて解説をしてくださった。夫婦が心中を決めてその身仕度をするところから始まる『姥捨て』は、カルチモンを手に入れるため持ち物すべてを売り払って金策をし、

映画を観て、寿司を食べ、漫才を聞き、夜行で水上温泉に行く。露天風呂から死に場所と決める山を眺めたり、カルチモンを服用するときもあめ玉のように数えたりする。薬が効かず覚めてしまい、泥まみれになって山を降りるのだが、女を背負って「おれには重すぎる」と、象徴的なことで筆を措く。ここにも暗くて特異な素材でありながら面白がらせるという、独自の話作りの力量が見える。何の疑問もなく文脈としてぴたりと合う語りであると。

『ヴィヨンの妻』のタイトルの不思議さ、由来についての先生の考察は興味津津であった。

家庭の幸福を守ろうとする明治時代の風潮に

迎合しなかった無頼派詩人で、翻訳家の矢野目源一が、十五世紀のフランスの詩人フランソワ・ヴィヨンの十行の詩を江戸情緒たつぷりに見事な日本語に訳していたが、太宰がこれに驚き、彼に興味を持ち、知的スターをからかうつもりで『ヴィヨンの妻』に取り込んだのではないかという。

『ヴィヨンの妻』は、『斜陽』と並行して十日くらいかけて仕上がった作品。偉いらしいが、やるのがひどい主人のあと始末のため、酒処へ出向く妻が、電車の中で、夫の書いたフランソワ・ヴィヨンについての長い論文が載った雑誌の中吊り広告を見る。ヴィヨンという名が出てくるのはこの一ヶ所だけ。

末尾の夫婦の会話「人非人だつてさ、二七貴族だつて」いいのよ、私たちは生きてさえいれば」は、今でも有名なセリフだ。

先生は、太宰が、無頼に生きた矢野目源一を主人公の大谷に重ねたに違いないという。そして、太宰は、生きにくい世を嫌悪し絶望して、意識的に人生にけりをつけたのだろう。また、太宰は人間をよく見分けることの出来る文学者であったと結ばれた。

限りなく造詣が深い池内先生の話されたいくつかのエピソードを紹介し切れず残念である。

ユーモラスに繰り広げられた太宰の世界にどっぷりと浸かることが出来た、まさに至福の一時間十五分であった。
(青木朝子)

三鷹に生きた太宰治

取材こぼれ話

1月23日(土)
午後2時～

太宰治をテーマにした第四回沼津文学祭「アラカルト講座」もバラエティーに富んだ内容でしたが、このたびの牧水記念館文化講座は、朝日新聞沼津支局長だった佐藤清孝さんから新聞記者として取材したこぼれ話が伺えると、胸ワクワクで参加しました。

佐藤さんは、沼津の前任地の青森支局で太宰に関する記事を扱い、沼津では、三島北高校郷土研究会による三島での太宰の足跡のマップづくりを記事にし、沼津とのかかわりも取材した。そして、三鷹に移って太宰とかかわりのあった人たちと出会い、いま書き残しておかなければとの強い思いにかられて、朝日新聞むさしの版に連載記事を書いたと言い、太宰治との宿縁をつくづく感じたとのことでした。

ふり返ってみますと私にもいくつかの縁があります。太宰の作品との出会いは高校二年生のときで、先生が薦めてくれた『斜陽』『富嶽百景』『晩年』などを読んで興味を持ちましたが、沼津市志下に嫁ぎ、坂部酒店の近くに住まいして、当主の光宏さん（当時一歳で、直接的体験や記憶はないようです）から、写真、資料を拝見し、親から伝え聞いた話などをお聞きするうちに以

前読んだ本の記憶が甦ってきました。長部日出雄さんのNHKでの講座を聞き、沼津桜桃忌に参加して鈴木邦彦先生のお話に接するなど、太宰との縁をつよく感じ、惹かれてゆきました。佐藤さんは、一人の作家が亡くなつてから六十年経つても顕彰活動が続いているのは極めて異例なことで、桜桃忌には若い人たちがたくさん集まってくる。太宰の作品には若い人たちが惹きつける側面があるのは事実で、三鷹にゆかりのある山本有三や武者小路実篤の作品を読む高校生なんて今時いない。太宰の作品は時代を超えて輝きを増すのではないかと、太宰文学の魅力の本質について語りました。



佐藤さんは太宰がなぜ三鷹に住んだのか、三鷹という土地柄と三鷹がどのように太宰を育み、作品に反映されたかといったお話をされました。太宰との縁を強く感じた私は、太宰の最後の地となった三鷹にぜひ行ってみたいという気持ちにかられて、先頃足を運びました。

佐藤さんの話にも出た「太宰治文学サロン」に立寄り、ゆかりの場所を何ヶ所か回りましたが、玉川上水は、小さな美しい川でしたが、当時は水流が激しく「人喰いの川」といわれ、落ちると助からないことが多かったそうです。山崎富栄さんの最後に残された手紙も見せてもらいました。

禅林寺にあるお墓にもお参りしましたが、なんと森鷗外の墓と向かい合うような位置にありました。それを見て、太宰に対する（隅外と肩を並べるような作家でありたいとする彼の希望を叶えてあげたいという）奥さんの美知子さんの気持ちを感じとりました。

佐藤さんが取材された事柄についての今回のお話は、時宜になつていたし、私にとっても三鷹を再び太宰の町として認識させてくれました。記憶の彼方に消えてしまう建物、ゆかりの人々、生活の臭い、それらを取り上げて、太宰の作品、人物像を今の人々の心によみがえらせてくださったことは感謝にたえません。また、佐藤さんと膝をつき合せるようにしてお話を伺えたことは大変幸せでした。（杉山ますみ）

牧水短歌の問題点

「解釈・鑑賞をめぐって」

11月28日(土)
午後2時～



牧水の遺墨、遺品、書籍を中心とした「特別企画展」(十一月十七日～十二月二十日)の記念講演会は、元日本大学教授・元日本歌人クラブ会長で、「あるこ」主宰の藤岡武雄先生を講師としてお迎えして開催された。

先生は独自の実証的研究方法による作品の解釈・鑑賞を展開され、短歌は一人称文学であるから、作者の動機・創造主体・背景・心情を明確にすることで、作品をより正確に捉えることができること。年譜は作者の事実が記録されたものなので大事であると強調された。

作例として第一に次の作品が取り上げられた。
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも
染まずただよふ

初出は雑誌「新声」で、「白鳥」とルビがあり、「海をあを空の青」となっていたが、第一歌集『海の声』で「白鳥」とし、空と海の位置を訂正。第三歌集『別離』では安房の海岸で詠んだ歌の中に入れられる。この歌には、問題になる点はいくつかある。まず、かもめと解される白鳥は何を意味するかについて、窪田空穂は牧水自身武川忠一も自身の孤独な姿、木俣修も自身を白鳥に擬したものとし、小枝子をさすとする長谷川銀作は相聞歌、佐佐木幸綱は恋の不安・孤独を詠ったものとする。藤岡氏は恋人の小枝子を白鳥と詠んだ歌がほかにあるとする。ほかに、白鳥自身だとする森脇一夫説もある。

次に、白鳥は空中に漂っているのか、波の上かについて、窪田・武川・長谷川・藤岡は空中と、木俣は波の上と解していることを紹介した。さらに、「哀しからずや」の疑問的な形は、白鳥に語りかけているのか、白鳥に対する感情移入なのか、牧水自身の姿をさすのか、白鳥自体の感情とするのか、諸説あるが、当時の牧水と小枝子との関係がどうであったかを考えて解釈することが大事と指摘された。

藤岡氏は、自身のことを語らない小枝子に対する牧水の煩悶が込められた求婚歌。佐佐木幸綱も新しい自然主義的失恋歌という。

作例の第二として次の作品が取り上げられた。
幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国
ぞ今日も旅ゆく

明治四十年夏、帰省の途次、友人直井敬三・土岐善麿と京都まで同行。神戸から別行動で岡山から新見へ至り二本松峠を越える旅で詠んだ歌。万人に膾炙された歌だが、齋藤茂吉・森脇・佐佐木はカールプツェの世界を、木俣は漂泊の思いを、大悟法利雄は西行・芭蕉の心情を言い、人間の内奥に潜む果てしない寂寥感と捉える。藤岡氏は、友人鈴木財蔵への手紙に牧水は「迷へる魂のいかばかりか慰さめ候はむ」と書き、小枝子を恋する自身の寂寥感を覗かせ、旅に出る前に会った小枝子に会えない寂寥感を増幅させていると、実証的に解釈している。

作例の第三には次の作品が取り上げられた。
かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびし
ものはなつかしきかな

詞書に「九月初めより十一月半ばまで信濃国浅間山の麓に遊べり、歌九十六首」とある。その中の三番目の歌にのみ「懐古園」の注があるのに、この歌まで小諸城址で詠んだ「兵どもが夢のあと」の感慨とする解釈が広くなされているが、藤岡氏は、失恋を癒すため小諸に来ていたので、詞書を中心に前後の作から、「ほろびしもの」は小枝子との終った恋、失恋の歌とした。以上のとおり、実証の見地からの作品三首の解釈が藤岡氏から示された。(星谷亜紀)

第二十回 中学生短歌コンクール

平成二十一年度「中学生短歌コンクール」で特筆されるのは、市内の中学校十九校の全校が参加してくれたことである。全校の参加が悲願のようになっていたが、二十回の節目の年にその願いが叶えられたことは大きな喜びである。

千七百七十七首の応募作品の審査は大変だったが、全中学校の参加が励みになりいつにも増して力が入った。特選十首、入選四十首の選に当たった青木朝子、杉山芳春、曾根耕一、星谷亜紀、須永秀生の五名も選考に苦労したが、結果的には入選を四十三首にして落着した。

特選の作品を寸評と解説付きで紹介する。

夏の日の夕日さしこむキッチンで母が切る
のは真つ赤なトマト 第四中 原川珠美
夏日の暑さと真つ赤なトマトのイメージが鮮烈である。

夏の風むぎわらぼうしをかつさらつて青い
海へとかぶせていった 片浜中 小松莉緒
麦藁帽子が風で飛ばされた事実の諧謔的比喩表現が秀逸である。

草刈り機初めて使う母の背を不安気に見る
じいじとばあば 愛鷹中 増田佳奈美
農作業従事者の引き継ぎを背景に母と祖父母を見事に活写している。

上京しはじめて気づくさみしさはケンカばかりしていた兄の存在 門池中 森下美希
進学か、居なくなつてはじめて知つた兄妹の愛。
亡き友の笑顔のようなあさがおは明るく咲いた淡い空色 第一中 峯 知世
淡い空色が意表を突いて心象風景にまで思いを高めた。

BOOK OFFが買うはずそのマンガおもしろそうに読む顔見しり 第二中 望月 航
顔見知りだけに「それ買うの」と言えないのだ。
ブックオフは立ち読みOKな古書店で現代風俗でもある。

赤とんぼ夕日へ向かい飛んでいくとまれとまれとそつと指出す 大岡中 武藤真里奈
指を挙げると赤とんぼが止まる経験が背後にある。

朝霧についたとたんにおでむかえどつしり
すわる大きな富士山 大平中 稲村瑞穂
朝霧高原からの富士山の雄姿への讃歌である。
制服に飛んだみかんの汁さえもなくしたくない旅の思い出 長井崎中 小坂莉世

修学旅行の思い出か。「さえ」の強調が生きる。
ドキドキと高なる鼓動深呼吸一本止めるぞ
PK戦 暁秀中 津留拓弥
サッカーのPK戦でのゴールキーパーの気概が

臨場感を高めて表わされている。
部活の歌は多かったが、「疲れる」「先輩を引き継いで」「暑い」と決まり文句が多かった。部活

も、夏祭りも、花火も、修学旅行も、野外学習も、夏休みの宿題も、詠って良いけれど個性が大事。皆と同じでは「へー」で終わってしまう。入選歌もこの十首に劣らない作品が多く、記念館での短冊展示をご覧の方が感心されていた。「夏期講習プリントだけをときまくり学習能力ついたのでらうか 第二中 川口亜希子」「夏休み思い出いつばい夢いつばいいらなけれど宿題いつばい 戸田中 山田大登」などの批判精神は短歌の一つの表現方法。特選の十首は牧水祭・碑前祭の式典で表彰された。(須永秀生)



平成21年10月18日(日) 第56回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式

第十四回若山牧水賞に大島史洋氏の歌集『センサーの影』



(写真提供 宮崎日日新聞社)

平成二十一年度の第十四回若山牧水賞は、大島史洋氏の『センサーの影』(ながらみ書房刊)に決った。授賞式は本年二月九日(火)宮崎市の宮崎観光ホテルで行われ、選考委員の一人である佐佐木幸綱氏の「牧水と白秋」と題した記念講演が行われた。翌十日(水)は、大島史洋氏による「牧水と言葉」の演題の受賞記念講演会が延岡市野口記念館で開催された。

大島史洋氏は、昭和十九年岐阜県中津川市に生まれ、慶応大学文学部卒業後、早稲田大学大学院国語学専攻に進む。習志野市在住。四十六年小学館に入社し、在職中に『日本国語大辞典』などの辞書編集に携わる。父親の影響で中学三年の時に歌を作り始め、三十五年に未来短

歌会に入会。現在、『未来』編集委員、選考者。平成十五年に第八歌集『燠火』で第三回山本健吉文学賞、十九年に第九歌集『封印』で第三十四回日本歌人クラブ賞、十八年の作品『賞味期限』で第四十二回短歌研究賞を受賞している。

歌集に『藍を走るべし』『わが心の帆』『炎樹』『時の雫』『いらかの世界』『四隣』『幽明』、歌論集に『定型の視野』『定型の力』『定型の方法論』『歌の基礎』、エッセー集に『言葉の遊歩道』がある。『センサーの影』は第十歌集で、十四年から十六年までの作四百五十二首を収める。

選考委員の岡野弘彦氏は『センサーの影』という題名には陰影があり、作者が時代を考える時の心の在り方がよく出ているが、これまでの歌とは違う伸びやかさ、表現の自在さが新たな魅力に加わってきた。佐佐木幸綱氏は「歌集には作者が五十年代後半から六十年代前半のころの作品が収録されている。中年から初老に入っていく、都会で生きる男の感慨が生活の感覚の中で歌われているのが特徴である。馬場あき子氏は「ある年齢に達した人によって初めて開かれる、哀愁まつわる本物のユーモアが感じられる。作者は文学や言葉を相手に生きてきた。きまじめな人には定年を迎える時にふっとほどけてい

く心がある。作者はそんな気持ちの中で自分の人生を振り返っている。伊藤一彦氏は「久々の男性の単独受賞で、逆にいうと、五十年代男性がなかなか時代に対する思いを歌ってこなかった」と評した。

『センサーの影』から自選作品を紹介する。

思うらく骨の髄まで戦後なる時代を生きて
今の不愉快

年齢とともに褪せゆく執着を樂しむごとく
かき立てることく

怒りには力がいると切実に思いいしころ冷
酷なりし

花の名を思い出せない母と立つ生ゴミ捨て
し穴のかたえに

嘘くさいとみずから思いしゃべりおり言葉
と顔に力をこめて

自転車は積み重ねられ冬の陽の深く射し入
るスポークの錆

絶対に許さないとどのような崖つぶちに
人を立たせたのだろう

センサーに明かり点れば言いようのなき虚
しさに影は伸びおり

土日なく謝罪をつづけし晩年の役職を聞く
友の訃報に

意味のない歌を好むはさもあらむそいう
時代に生を受けたる